

児童生徒福祉作文集 第44集

**みんなが
えがおになる
暮らし**

令和6年度

社会福祉法人 鹿嶋市社会福祉協議会

本冊子は、原文のまま掲載しています。



「第四十四集

児童生徒福祉作文集」の

発刊にあたって

社会福祉法人 鹿嶋市社会福祉協議会会長 田口伸一

今年度で四十四回目を迎える児童生徒福祉作文事業には、市内の児童生徒の皆さんから合わせて1,331編の応募をいただきました。この事業は、児童生徒の皆さんが家庭や学校・地域社会の生活の中で思いやりの心を持ち、ふれあいの輪を広げ、明るい福祉のまちづくりに参加するきっかけとなることを願って実施しております。

今年度も、テーマを「みんなが えがおになる くらし」とし、福祉について様々な側面から考えを深めてもらいました。小学校低学年の作品は、家庭内や学校などの身近なふれあいについて書かれているものが多く、普段の生活の様子が思い浮かぶようでした。高学年になると、興味関心があることについて調べている作品も増え、日頃から探求心を持ち、様々なことに目を向けていることがよくわかりました。中高生になると、地域課題について目を向けている作品が増え、近年、多発化・激甚化している災害に関連し、災害時の避難や被災後の生活について、高齢者や障がいのある方の不安がどのようにしたら解消するか考え、福祉避難所について書かれている作品もありました。このように、様々な内容で「みんなが えがおになる くらし」について書かれていましたが、いずれの作品からも、家族や友人などの日頃のかかわりがある人だけでなく、全ての人々を思いやる気持ちが溢れていました。

今回の応募作品を通じて、児童生徒が自らすすんで学び、考える姿勢をもっていることを改めて感じることができました。そうした児童生徒が、地域で活躍できる場があることで、大人にはない気付きや視点から、今後の地域活動の大きな力になってくれることと思います。一人の力では、笑顔あふれる地域を創ることはできません。私たち大人が、児童生徒も地域の一員として尊重し、共に地域づくりをしていく意識をもつことが重要であると考えています。

また、今回の作品には、大人がルールを守らなかつたり、挨拶を返してくれないのは何故かという、素直な意見が書かれた作品が複数ありました。児童生徒の想いを真摯に受け止め、誰もが笑顔で挨拶しあえる地域づくりに取り組み、地域福祉活動計画の基本理念である「関わり合いと支え合いで、安心して暮らせる地域を創る」「支援」から「おたがいさま」へのまちづくりの「の実現に向けて、今後も市民の皆さまや各福祉団体、ボランティア、行政、事業者などと連携を図りながら推進してまいりたいと思います。また、児童生徒が福祉に触れ、将来にわたり身近なことで捉えるきっかけとなるよう、今後も福祉体験の実施や学生ボランティアの育成に取り組んでまいります。

結びに、この児童生徒福祉作文事業に關しまして、多大なご協力をいただきました関係者の皆さま並びに、福祉作文の審査にあたられました委員の皆さまに心から感謝を申し上げます、発刊のあいさつといたします。

目次

発刊のことば

社会福祉法人 鹿嶋市社会福祉協議会会長

田口伸一

最優秀（小学生の部）

みんながえがおになるくらし

豊郷小学校 一年

久保 壱

1

みんながえがおになるくらし

鉢形小学校 二年

荒川 保

1

一言がいえなくて

鹿島小学校 三年

横田 海

2

レッドカップキャンペーンでつながる未来

大同西小学校 四年

立原 悠之介

2

ひいおばあちゃんは認知症

鉢形小学校 五年

関野 瑛斗

3

ママ、私がやるからね！

大同西小学校 六年

阿久津 彩衣

4

最優秀（中学生の部）

パン屋さんで思ったこと

大野中学校 一年

満川 元

5

人とのつながりが救った命

鹿島附属中学校 三年

大場 美空

6

最優秀（高等学校生の部）

地域福祉の大切さ

鹿島高等学校 一年

清島 崎音

7

「生きる」とはどんなこと

鹿島高等学校 二年

清島 宮

8

【鹿嶋市障がい者福祉計画において「障害者」を「障がい者」と標記することで統一しています。本冊子もそれに準拠するかたちで標記させていただきます。】

優 秀 (小学生の部)

みんながえがおになる暮らし	鹿島小学校 一年	大	お	野	の	瑛	えい	士	じ	10
ひいばあちゃんありがとう	高松小学校 一年	岡	お	野	の	友	とも	哉	や	10
あんしんの暮らし	三笠小学校 二年	鈴	す	木	き	唯	い	世	よ	11
みんながえがおになる暮らし	大同東小学校 二年	長	なが	岡	お	樹	たつき			11
ありがとうの気持ち	豊津小学校 三年	浅	あ	間	ま	琴	こと	羽	は	12
ぼくのひいじいちゃん	中野西小学校 三年	谷	や	川	が	伊	い	織	おり	13
バリアフリーって何だろう	豊郷小学校 四年	谷	や	田	た	蒼	そう			13
ふくし体験を通して学んだこと	中野西小学校 四年	肘	ひ	井	い	亮	りょう	太	た	14
私の左手のペンギン	豊郷小学校 五年	高	た	野	の	茉	ま	子	こ	15
生活しやすい環境づくり	大同西小学校 五年	沼	ぬ	田	た	愛	あい			16
まほうの言葉	豊津小学校 六年	山	や	口	くち	花	か	音	のん	17
命の大切さについて	中野東小学校 六年	森	もり	下	した	ゆりあ				18

優 秀 (中学生の部)

自分らしく
 みんながえがおになるくらいし
 ペースメーカーを理解する
 住みやすい街づくり
 おじいちゃんと運転免許
 福祉のある世界のために

鹿島中学校	鹿野中学校	平井中学校	大野中学校	平井中学校	鹿島高等学校 附属中学校
一年	一年	二年	二年	二年	三年
有	堀	神	小松	大	安
本	川		崎	宮	藤
仁	来	芽	海	千	亜
胡	姫	桜	乃	尋	佑
19	20	21	22	23	24

優 秀 (高等学校生の部)

差別のない社会をめざして
 祖父との約束
 個人の尊重の優しさ
 福祉とは

鹿島高等学校	鹿島高等学校	鹿島学園高等学校	鹿島学園高等学校
一年	一年	二年	二年
内	荒	藤	渡
野	井	井	邊
響	二	優	柚
子	葉	姫	花
25	26	28	29

佳作入選作品

児童生徒福祉作文応募数

あとがき・児童生徒福祉作文審査委員

30 32 33

最優秀（小学生の部）

みんながえがおになるくらし

豊郷小学校 一年

久保 壹渡

ぼくがほいくえんせいするとき、おしゃべりがとくいじゃないおともだちがいました。いつもおはようといつてもあいさつしてくれなくて、ぼくはむしされているとかなしいきもちになっていました。それをままにはなしたら、

「おともだちのなかにはじぶんとおなじようにおしゃべりしたり、あそんだりできないこもいるんだよ。」

といわれたけど、なんでなのかがぼくにはよくわかりませんでした。

ぼくはおしゃべりがすぎだし、めもみもてやあしだつてすぐぐんきです。

それでも7さいのぼくにはできないことばかりです。まいにち、ごはんをたべたり、おふろにはいったり、げんきにがっこうにいったりできるのはばばやママたちがたすけてくれるから。できるひとができないひとをてつだったりしてせいかつしているとしりました。おばあちゃんのおうちではおおばあちゃんがあしがわるくてつえをつかっただから、だんさをなくしたり、つかまるところをつくったりして、おおばあちゃんがひとりでもあるけるようにくふうしています。ぼくはゆかにおいてあるものをどかしてあげるこしかできないけど、「ありが

とう」といつてもらえらうれしいきもちになります。

ぼくにできることとできないことがあるみたいに、みんなにもできることとできないことがある。ぼくももつとたくさんできることをふやして、ちからもちになってこまっているひとをたすけたいとおもいます。

みんながたすけあえば、みんながえがおになって、まいにちたのしくらせます。

みんながえがおになるくらし

鉢形小学校 二年

荒川 海偉

ぼくは家ぞく七人でくらしています。おとうさんとおかあさんのほかに、おにいちゃんと、おとうとと、二人の妹がいます。きょうだいが多いので、ぼくはよくおかあさんのお手つだいをしています。

たとえば、おかあさんが家のおそうじをするとき、お兄ちゃんといっしょにおかたづけを手つだったり、ふきそうじをしたりします。お手つだいをすると、おかあさんのたいへんさがよくわかります。おかあさんに言われてからお手つだいをすることが多かったです。おかあさんのたいへんさを知って、すすんでお手つだいをしようと思うことがふええました。

お手つだいをしているうちに、ぼくはあることに気づきました。それは、おかあさんがいつも「ありがとう」と言ってくれることです。このことを聞くとうれしくなって、またお手つだいをがんばろうという気もちになります。ぼくはいままで、おかあさんが家のことをやってくれていても「ありがとう」ということばを言っていないませんでした。でもそ

の「ありがとう」をつたえることが、おかあさんへの思いやりなんだと思います。ぼくもおかあさんにたいして思いやりをもち、おたがいに「ありがとう」と言える家ぞくになりたいです。

ぼくにはまだ、たくさんの人をえがおにする力はありません。でも、じぶんの近くにいる家ぞくやともだちをえがおにすることはできると思います。「ありがとう」のことはたくさんつたえることで、えがおのわすこしずつひろげていきたいです。

一言がいえなくて

鹿島小学校 三年

横田 悠之介

「手伝おつか。」

ぼくは、二年生の終わりに、うでをこっせつした。この言葉は、けがをしてきゆう食を運ぶぼくに、友だちが言ってくれた言葉だ。こっせつをしてしまいなんだかはずかしい気もちと、できることは自分でしなくちゃと思う気もちと、頭の中がごちゃごちゃして、

「だいじょうぶ。」

と答えていた。かた方の手だけで、きゆう食を作るのは、いつもは簡単なことでも、いつもよりずっといっぱいの時間がかかった。それにスーブも少しこぼれてしまっていた。そのとき先生がこんなことを言ってくれた。

「自分でがんばるのもかっこいいよ。でも難しいこともあるよね。助けてもらっていいんだよ。いつも悠之介くんが助けてくれるみたいに、友だちも、先生もいつでも助けるよ。」

次のきゆう食の時間、ドキドキしながら、

「きゆう食作の手伝って。」

と伝えてみた。そしたら何人も友だちが、

「手伝うよー。」

とかげよってきてくれた。ドキドキはいつの間にかきえて、え顔でありがとうとつたえることができた。

ぼくは初めて手伝ってもらうがわになった。今までこまっっている人がいたら助けたいと思っていたし、手伝ってあげていた。でも、もしかしたら、あのときのぼくみたいに手伝ってと言えない人もいたのかもしれない。ぼくは、みんなが大へんかなと思うとお願いできなかつた。だからぼくはこれからだれにたいしても、
「いっしょにやろう。」

と声をかけてみることに決めた。そして、みんなで協力してえがおでうごせたらいいなと思う。

レッドカップキャンペーンでつながる未来

大同西小学校 四年

立原 杏紗

夏休みに、家族でおすし屋さんに行きました。そこでは、サーモンをたのむと、一皿につき〇・一円を、お金のない子どもたちの給食しえんにきふできる、「レッドカップキャンペーン」について書いてありました。わたしは、そうした子どもたちのためにきふしたいと思い、サーモンをたのみました。これで〇・一円きふできることが、うれしくなりました。

でも、〇・一円は、ちよつと少ないと思ひどうすれば大きい金がかかるか考えました。みんながレッドカップキャンペーンに参加すれば、たくさんの子どもたちを救えると思ひました。そのためには、レッドカップキャンペーンのマークを知ることが大切だと思ひ、くわしく調べてみました。

レッドカップのマークがついた商品を買つと、売り上げの一部が、子どもたちの学校給食しえんにつながります。二〇一一年に開始されてから、五十九か国、合計二千四百万人以上の子どもたちに、学校給食が届けられたそうです。私も学校で給食を食べていますが、世界には給食を食べられない子どもたちがいることを知つて、かわいそうだと思ひました。そうした子どもたちがご飯を食べられるように、きふをしていきたいと思ひました。

でも、かわいそうだと思ふことは、えらそうだなと思ひました。自分は何でももつていふような感じだと思つたからです。ご飯が食べられないという一部のことと決めつけけないで、その人の全体を見ることが大切だと思ひました。

レッドカップキャンペーンは、食事のしえんだけでなく、学校に通ふことで教育の機会を与えることにつながります。そうすることで、社会や国の発てんの力にもなるそうです。それを知つて、未来につながる取り組みだと思ひました。自分のしたことが、その一部になっていることは、すごいと思ひました。

レッドカップキャンペーンは、毎日の買い物でしえんができます。一回買っただけでは困つていふ人のしえんはできません。たくさんの人が協力を継続することで、きふの金が増えます。今ある商品は、玉子やバナナなどの食べ物だけでなく、洋服やマスク、映画館のポップコー

ンなど色々あります。たくさんの方が、きふ付きの商品のはん売に取り組むことで、きふをしやすくなると思ひました。

私にできることは、レッドカップマークのついた商品を買ふことだけでなく、たくさんの方に、この取り組みを知つてもらふことです。そうしたことで、たくさんの子どもたちのあたたかい未来につながっていくと思ひます。

ひいおばあちゃんは認知症

鉢形小学校 五年

関野 瑛斗

ぼくのひいおばあちゃんは、九十四才です。九十才までは、よく食べて、よくそうじをして、よく歩いて、とても元気でした。七十才まで仕事をしていたこともあつて、今でも自力で行動をすることができます。

そんな、ひいおばあちゃんが少しずつ物忘れをするようになってきてしまひ、やかんを火にかけたことも忘れるようになってきてしまひました。ぼくは、ひいおばあちゃんが今までできていたことが会いに行くたびにできなくなつていく様子を見ていて、とてもショックを受けました。そのうち、ぼくの名前も忘れられてしまふだろうなと思ひました。年れいを考えれば当然のことかもしれませんが少しでも進行がおそくなればいいと思ひ、会いに行けない日もたくさん電話をしまひました。ひいおばあちゃんは、ぼくが電話をすると、とても喜んでくれて、元気づけてあげるはずのぼくが、元気をもらつていたこともたくさんありました。

ひいおばあちゃんは、認知症だけでなく、ねむれない病氣にもなつて

しまったので、七月から施設に入ることになってしまいました。家族全員でなやんで決めたことでしたが、ひいおばあちゃんが施設に行つてから、家がとても静かになってしまい、みんなすごくさみしくなっていました。ぼくも、おばあちゃんの家に行つてもひいおばあちゃんがいなくてとてもさみしかったです。

夏休みに、おばあちゃんの家に行くといいおばあちゃんが施設から一日だけ外泊をしてくいて、久しぶりに会うことができました。久しぶりに会ったひいおばあちゃんは、なんだかやせていて、体も一回り小さくなってしまっていたように感じました。予想通り、ぼくの名前は忘れてしまっていたけれど、同じ時間をすごす中で、たくさん話しかけて思い出してもらうことができるともううれしかったです。ひいおばあちゃんと、ご飯を一しょに食べたり、花火をしたりする時間は当たり前ではないんだと思いがちでした。久しぶりに家族が全員そろうことができ、家の中がたくさんの笑顔であふれていました。夏休みの最高の一日になりました。

認知症になってしまったけれど、ぼくの中のひいおばあちゃんは、これからも負けずぎらいで、何にでも一生けん命取り組む、カッコいい人には変わりありません。そんな、ひいおばあちゃんをぼくは、そんけいしています。ひいおばあちゃんのようにカッコいい人生を送れるようにこれからも何事にも一生けん命取り組んでいきたいと思えます。

ママ、私がやるからね！

大同西小学校 六年

阿久津 彩衣

私のお母さんは、元気で明るく、とても優しいです。病気に強く、健康的に見えます。いつも強いイメージがありませんでした。ある日、突然お母さんが入院することになりました。それを聞いた私は、急な出来事で、何でだろうと不安な気持ちになりました。

入院当日、私はお母さんに、

「ママ、頑張つてね！」

と応援の言葉とお守りを作つてわたししました。お母さんは、

「頑張るよ！彩衣もさみしいけれど頑張つてね。応援してるよ。」

と言つてくれました。私はそわそわして、落ち着きませんでした。お母さんがいない夜を過ごすのは、私にとっては初めての出来事だったので、夜はなかなかねむることができず、泣いてしまいました。それからお母さんが退院するまで、何回も何回も、

「あと何日で帰ってくるの？」

と、お父さんに聞きながら、まだかな？まだかな？と首を長くして待つていました。

待ちに待った退院の日。学校から帰ると、

「お帰り。」

とお母さんの声。私は、これでいつもの生活が戻ってくるかと安心しました。しかし、あの時のような、元気いっぱいのお母さんの姿が、なつかしく感じるような、なんだかいつもとちがうような……感じがしまし

た。

どんな時も元気だったお母さんは、今はあまり元気がありません。歩くスピードもゆつくりになり、つかれやすいです。そんなお母さんを見て、私は、お母さんの力になれることをしてあげようと思いました。私に何ができるのかを、お母さんのことを観察しながらたくさん考えました。

私は、お手伝いをたくさんしたり、歩くスピードを合わせたり、歩く時には背中をやさしくおしてあげたり、マッサージをするなどして、できるかぎりのサポートをすることにしました。特に、洗たく物を干すことは、思っていた以上に大変な仕事でした。私が手助けするたびに、お母さんは、

「ありがとう。とても助かるよ。」

と、笑ってくれます。お母さんの笑顔が増えるたびに、元気が戻ってくる気がします。

お母さんは、今までは、家事をしたり仕事をしたり、一緒に遊んだり、当たり前前のことを当たり前前にできていました。私は、やってもらって当たり前だった日常に感謝の気持ちでいっぱいになります。今度は、私ができることを一つずつ増やして、お母さんのことを支えていきたいです。そうすることで、お母さんのにこにこ笑顔が増えるし、少しでもつかれを取ってあげることができると思います。

私はお母さんに、

「ママ、私がやるからね！」

と伝えたいです。

最優秀（中学生の部）

パン屋さんで思ったこと

大野中学校 一年

満川元香

私は父と一緒にパン屋に行きました。そこには、ソーセージパンや、ハムチーズパン、チョコくるみパンなどのとてもおいしそうなパンがたくさん売っていました。なんとそのパンは、こんなに具がたっぷりあるのに一個百円で、とても驚きました。奥の方を見ると、パンを作っている人がいました。その人達は普通とはちよつと違う感じがしました。お父さんに聞いてみると、そこは障がい者の施設でやっているパン屋でした。

私はそのことを知ってとても驚きました。なぜなら、障がいのある方でも働けて、こんなにおいしそうなパンを作れるのがとてもすごいと思ったからです。その人達は、とても一生懸命働いていました。その姿を見て、感銘を受けました。帰って、そのパンを食べてみると、他のパン屋と比べて、具材がぎつしり詰まっています、

「これで百円!？」

と驚きました。味もとてもおいしくて一度に四個もぺろりと平らげました。家族もおいしいねと大絶賛していました。私はそのパン屋に興味をもちました。

そのパン屋を運営している施設について調べてみました。その施

設では、熱心にパン作りをしているのも活動の一つですし、その他に、音楽を通じて心のケアも行っているそうです。また、地域交流行事「夏祭り」には、大勢の子どもたちが来ています。とても良い活動だと思いました。

そこで私は、障がい者について考えてみました。障がい者とは、体や心のどこかがうまくはたらかないために、不便なことや困ることがずっと続いている状態のことだと分かりました。もし私が障がい者の立場になったら、不便なことが多くてどのように生活したらよいのだろうかという不安な気持ちと、もし、目が見えない人だったら、どこに何があるか分からないのでとても恐怖心がおこると思います。そんな不安な気持ちと恐怖心や色々な思いがあるなかで生活をしていて、すごいなと感心しました。

これらを通して感じたことは、最初は、障がいのある人がパン屋で働いているのは不思議に思ったけれど、パンを買ってみてとてもおいしくて、努力していることが分かり、私も頑張ろうと、勇気をくれた気がしました。また、こういった障がいのある方でも働けるお店をどんどん増やしていければいいなと思っています。

私が、あのパン屋でパンを買ったこともそういつたお店が増えるサポートになると思います。とてもおいしいパンだったし、これからもどんどん買おうと思いました。

他にも、街の中で障がいのある人がやっているサービスを見つけたら、積極的に利用したいと思います。それが、障がいのある人達の仕事を増やすことにつながると思うからです。

これから自分にできることは、街の中に困っている障がいのある方がいたら声をかけたり、手をかしたりして少しでも不便なことを減らせる

ように、心がけていきたいと思っています。例えば、点字ブロックの上に自転車がとまっていたらどかすことです。以前に、目が不自由な人が、点字ブロックが分からなくなってしまったと話をしていたからです。こういったことだったら私にもすぐできると思います。他にも、こういうちょっとしたことが障がい者の助けになることがたくさんあると思うので、自分の生活の中で障がい者の身になって、探していきたいと思っています。

人とのつながりが救った命

鹿島高等学校附属中学校 三年

大場美空

先日、私はテレビで六十五歳以上の高齢者が、熱中症で多く死亡していることを知りました。そこで私は「家族や知人といった、周囲の人は気づかなかつたのだろうか」と疑問をもちました。熱中症で亡くなった高齢者について詳しく調べてみると、独居高齢者が多く亡くなっていることが分かりました。独居高齢者とは、独りで日常生活を送っている高齢者のことです。独居高齢者は年々増加しており、これを問題として捉えている人もいます。また、結婚していなかったり、子供がいても同居を望まなかったりと、独居となる原因も様々です。

私の父に、仕事で知り合った九十歳のおばあさんがいます。そのおばあさんも独居高齢者です。そのため、父は困っていた時に手を貸してあげたり、お互いの家族のことについて話すといった交流が続いていました。

八月になってすぐの頃でした。その日は熱中症警戒アラートが発表さ

れるくらいとても暑い日でした。その日の夜、父がいつもより遅い時間に会社から帰ってきました。その時の父は、とても疲れた顔をしていました。私は「仕事が忙しかったのかな」と思っていました。しかし、父は、「今日、おばあさんが救急車で運ばれて大変だったんだ。」

と言いました。詳しく話を聞いてみました。朝、仕事で父がおばあさんの家を訪ねると、家から出てきませんでした。携帯電話をかけても出ません。開いていた窓から、テレビの音が聞こえるだけでした。お昼にもう一度訪ねても、全く同じ状況でした。どうしても気になり、夕方にまた訪ねたそうです。しかし、状況は全く変わりません。「これは何かあったんだ」と思い、警察に連絡しました。救急隊員が家の中に入ると、おばあさんが一人で倒れていたそうです。熱中症か病気がは分かりませんが、状況から見ると、前日の夜から倒れていたと思われました。実態を知った時に父は「警察に連絡して良かった」と感じたそうです。元々、おばあさんの息子さんは近くに住んでおらず、疎遠になっていたそうです。今回は父がたまたま気づき、念のために警察に連絡したので大事には至りませんでした。しかし、もし父が連絡をしていなかったら発見が遅れてしまい、誰にも気づかれずに命を落としていたかもしれませぬ。

私はこの出来事から「思いやりによって作られた『人とのつながり』が、命を救うきっかけとなったんだ」と感じました。「人」は一人だけでは生きていくことはできません。みんな誰かに助けられて生きています。だからこそ、私は「思いやること」は生きる上で大切だと思っています。私は思いやりとは、相手の気持ちをよく考えて接することだと考えます。そのため私は、周囲の人が独居高齢者に対して声を掛け合うといった、思いやりの心をもって行動するべきだと思います。それによって相手を思いやる機会も増え、「人とのつながり」を作ることができ

と思います。

また、私はこの作文を書いてみて、思いやることの大切さに気づきました。そのため、これから人とふれあう時には、思いやりの心をもって接していきたいと思いました。例えば、祖父母の話し相手になってあげたり、困っていたら手伝うなどというふうに接したいと思います。そして、父のように相手の気持ちを大切にして寄り添える人になりました。

最優秀 (高等学校生の部)

地域福祉の大切さ

鹿島高等学校 一年

島崎音桜

私は、地域のあやめ公園で行われた掃除ボランティアに参加したことがあります。この活動を通じて、身近な福祉について深く考える機会を得ました。

このボランティアに参加したきっかけは、友達からの誘いでした。普段からこの公園を通学路として利用していた私は、「自分たちの住んでいる地域をきれいに保つのは大切なことだ」と感じ参加を決めました。あやめ公園はその名の通り、季節になると美しいあやめの花が咲き誇る静かな公園です。特に春から初夏にかけて咲くあやめの花は、公園のシンボルとして多くの人々に愛されています。しかし、その美しさを維持

するためには、定期的な手入れが欠かせません。私たち清掃ボランティアは、まさにその手助けをするためのものでした。当日、私たちは公園に集まり、草むしりやゴミ拾い、そして落ち葉の掃除を行いました。あやめの花壇の周りには、風で飛ばされてきたゴミや、冬の間に積もった枯れ葉が多くありました。特に、花壇の中に混ざり込んでいる小さなゴミを丁寧に取り除く作業は、集中力が必要で、時間がかかるものでした。しかし、同時にその作業は、花を守り、美しい景観を保つためにも大切なことだと感じました。掃除をしている間に、近くを通りかかったお年寄りの方が「ありがとうございます」と声をかけてくれたことが、とても印象に残っています。普段は何気なく通り過ぎるだけの場所でも、こうした活動を通じて地域の人々と繋がることができると実感しました。また、きれいになった公園を見ると、これから訪れる人たちがこの美しい花を楽しむことに貢献できたと感じ、達成感が湧いてきました。このボランティアを通じて、私は「地域福祉」の一環として公園の美化活動がいかに重要かを学びました。あやめ公園は、ただの公園ではなく、地域の人々に癒しを与え、自然の美しさを共有する場所です。特に、子どもからお年寄りまで幅広い世代が訪れるこの公園が清潔で安全な場所であることは、地域全体の健康と福祉に直接つながっていきま

す。あやめ公園での掃除ボランティアの経験は、私に他者を思いやる心の重要性を教えてくださいました。清掃という一見単純な作業がどれほど人々の心に安らぎをもたらすか実感し、その経験を通じて、子どもたちが安心して成長できる環境の大切さに気づきました。そしてこの経験から、児童福祉に対する意識が変わりました。子どもたちが健全に育つためには、清潔で安全な環境が必要であり、その環境を整えることが大人の役

割だと感じます。私たち一人ひとりが日常の小さな行動を通じて、子どもたちの未来に貢献できることを忘れてはいけません。今後、私は地域での清掃活動や子どもたちの支援活動に積極的に参加し、彼らが安心して成長できる社会作りに貢献したいと思います。あやめ公園で学んだ教訓を胸に、児童福祉に取り組むことで、子どもたちの笑顔があふれる社会を目指していきます。

この経験を通じて得た気づきが、私だけでなく、他の人々にも影響を与え、共に子どもたちを支えるための一歩となることを願っています。そして、全ての子どもたちが健やかに育つ未来を築くために、今後も努力を続けていきたいと思えます。

「生きる」とはどんなこと

鹿島高等学校 二年

清宮 康太

皆さんは、心の底から笑えなくなったり、自分の目標を見失って前を向けなくなることがありますか。

僕はありません。今まであたりまえだと思っていたモノや人、環境を失って目の前が真っ暗になり自分の生きている意味が分からなくなりました。ひどい時は、喜びや悲しみなどといったものが感じなくなり、笑い方を忘れてしまった自分もいました。

これは、僕の中学校の入学式での出来事です。とある先生が登壇し、いきなり静かで緊張感溢れる体育館で誰もが知っているであろう「アンパンマンのマーチ」を登壇した先生が歌い始めたのです。体育館がザワめきしだしました。そして、僕の周りにいた同級生や他の保護者たちは

「なんだこの頭のおかしい教師は笑」と先生を笑って馬鹿にするような声が聞こえました。その後、先生は僕らに問いかけました。「なぜ、私はアンパンマンのマーチを歌ったと思いますか。」と、問いかけられましたがもちろん僕は答えることができません先生が話し出しました。「この曲は、私にとってとても大切な曲です。自分がなんのために生まれて、なにをして生きるのか。それを見つけてくれたのがこの曲だからです。」と先生の言葉を聞いた時、僕は驚きました。自分が小さい時に何気なく聞いていたこの曲がこんなに深い歌詞だったなんてと、思ったからです。

僕の勝手なイメージですが、思春期の学生はアンパンマンのことをバカにしている印象があります。小さい頃の僕にとって「ヒーロー」というのは仮面ライダーやウルトラマンのような驚異的な力で怪人や怪物を倒すという強さに惹かれてこれこそが「ヒーロー」だと思っていました。ですが、アンパンマンはどうでしょうか。顔が水でぬれたら力がなくて弱くて情けないヒーローになってしまいます。では、なぜアンパンマンはいろいろな人達から愛されるのでしょうか。

アンパンマンのマーチの中でこんなフレーズがあります。「今を生きること熱いところ燃える。だから君はいくんだどこまでも」アンパンマンにとって今を生きること熱いところが燃えるのはなぜでしょうか。それは、歌詞の中にある「みんなの夢を守るため」これこそがアンパンマンのところが燃える理由だと思います。顔が水でぬれて力がなくなつたとしてもどんな相手にも恐れず立ち向かいみんなの笑顔を「全力で」守るといふ気持ちの強さからたくさんの人達に愛される理由だと思います。

もし、みなさんが目標や夢を失いそうになつた時や心の底から笑えな

くなつた時も、必ずアンパンマンのような人に温かい優しきで慰めてもらえると思います。だから、アンパンマンにとって「生きるよろこびとはみんなの夢と心を守る」ことだと思えます。始まりがあるなら終わりがあるように生まれてきたならいつか死にます。この死ぬまでの時間と勇気を使って誰からも愛されることで生きる喜びを感じるといのがアンパンマンの生き方です。

最後に、アンパンマンのマーチの歌詞にもある「なんのために生まれて、なにをして生きるのか」この問いかけに対してみなさんは胸を張って答えることができますか。みなさんにとって「なに」が幸せで「なに」をしてよろこぶことができますか。それを答えられずわからないまま死んでしまつても後悔しないでしょうか。僕たちが生きる理由って一体なんでしょうか。そのようなことを訴えているのがこの曲だと思えます。僕はこの曲を通して自分の生き方を見つけることができました。それは、自分の気持ちに嘘をつかずに自分の好きなことを死ぬまでやっていきたい。これが僕の人生のモットーであり、「清宮康太」の生き方です。



優 秀 (小学生の部)

みんながえがおになるくらし

鹿島小学校 一年

大野 瑛士

ぼくはいま、おとうさんとおかあさんとおとうとと、まいにちえがおでたのしくくらししている。ぼくは、みんながえがおになるくらしとは、こんなことをすればいいとおもう。

まず、みんながなかよしになる。なかよくすごせば、えがおがふえるとおもう。

つぎに、あいさつをちゃんとする。「おはよう」「こんにちは」「さようなら」ってあいさつをするとぼくもいいきもちになるし、ともだちもえがおになる。

それと、いいことばをいいたい。「ありがとう」とか、「いいね」っていわれると、ここからうれしいきもちになる。おかあさんは、「うれしいことばは、ひとのこころをやさしくして、えがおをふやす。」とおしえてくれた。だから、よくないことばはいわない。いわれていやなきもちになることばは、かなしくしてえがおになれない。もしぼくがともだちにいやなことばをいいたら、ともだちがかなしいかおになつて、ぼくもおちこんでえがおになれないから。

ほいくえんのせんせい、ぼくのいいところは、「ひとのはなしをきいてからじぶんのいけんをいうところ」っていつてくれた。おとうさん

は、ぼくのいいところは、「いつもえがおで、たくさんのおともだちがつくれるところ」っていつていた。

みんながなかよくすごして、あいさつをちゃんとして、うれしくなることばをいつて、たくさんのひとともだちになれば、えがおがあふれてたいへんくらいになる。えがおがいつぱいのくらしをぼくはしていきたい。

ひいばあちゃんありがとう

高松小学校 一年

岡野 友哉

ぼくには、八十さいすぎてもハウスでピーマンをそだてていた、げんきなひいばあちゃんがありました。

「いつぱいたべろよ。」

と、つくつたやさいをたぐさんくれました。こしがまがつているのに、「いつまで、おぶえるかわからないから。」

と、たくさんおんぶしてくれました。赤ちゃんだったけど、ひいばあちゃんのせなかは、とてもあたたかくて、ふわふわとねむたくなるきもちよきでした。

げんきだったひいばあちゃんは、だんだんあるくのがゆつくりになりました。こしがまがつて、あるくのがたいへんそうでした。そとをあるくときは、あぶなくないように、ぼくはつえをとってあげたり、ゆつくりいつしよにあるいたりしました。

そんなひいばあちゃんとは、四さいのときにおわかれになってしまいました。そのときは、あまりおぼえていません。でも、ひとがし

んでしまうことは、とてもかなしいことだと、はじめてかんじました。

いまは、ばあちゃんがひいばあちゃんのことをおもいだしながら、ハウスでピーマンをそだてています。ぼくも、やさしくしてくれたひいばあちゃんをおもいだして、ばあちゃんがこまっているときは、たすけてあげたいです。おもたいものはこんであげたり、さがしものをさがしてあげたり、ピーマンのはこをつくってあげたり、たくさんおてつだいをしようとおもいます。そして、まちでおじいさんおばあさんを見たら、ぼくのをつえのかわりにかしてあげたいです。みんなにやさしくできるようになりたいとおもいます。

あんしんのくらし

三笠小学校 二年

鈴木 木 唯 世

今年のがんたん、わたしはおじいちゃんの家へあそびに行きました。夕方、かぞくでテレビをみていたら、みんなのけいたいでん話から、すごい音がなりました。のとはんとうじしんです。わたしはいそいでつくえの下にかくれました。

その時気になったことがあります。わたしのおじいちゃんは、びょう気で右の手足がうごきません。だからもしじしんがおきた時、どうやってひなんするのだろうと思いました。

じしんがおさまったころ、おじいちゃんにそのことを聞いてみると、おじいちゃんは少し考えて、

「おれは家にのこるかな。」

と、言いました。わたしはその言ばが、とても心にひっかかりました。

おじいちゃんにあん心してもらうためには、どうすればいいのだろう？ そう思ったので、図書かんで、ふくしについての本を読みました。すると、わたしが読んだ本の中に、ふくしひなんじよというばしよについて書かれているものがありました。

もしひなんじよで生かすようになった時、しょうがいがある人や、高れいの人などのたすけがひつような人たちが、あん心してすごせるようなしせつだそうです。ほかにも、こまっている人たちのためにそうだんまど口などもあることを知りました。

わたしはおじいちゃんの家へ行って、もしじしがきてもたすけてくれるばしよがあるから、あん心してくらしてほしいということをつたえました。

するとおじいちゃんは、

「じゃあもしものときは、そこにいこうかな。」

と、えがおになったので、おじいちゃんのふあんが少しへったような気がしました。

今はじしんがたくさんきていて、ふあんなことも多いけど、みんながあん心してくらせるようになればいいなと思います。

みんながえがおになるくらし

大同東小学校 二年

長岡 樹

「おはようございます。」

と、まいあさぼくは、げん気よくあいさつすることをこころがけています。げん気よくあいさつをすると、心も体もげん気になるようなきがす

るからです。またちいきにすんでいるおじいちゃんやおばあちゃんがよろこんでくれるからです。

しかし、さいきは、あいさつをしてもかえしてくれないおとながいて、とてもかなしい気もちになります。おとうさんとランニングをしても目もあわせてくれない人もいます。ぼくは、あいさつを、

「しないほうがよいかな。」

と、おもってしまいました。

また、じてん車にのっているとぼくは、左を、はしるように、おかあさんにおしえてもらったのですが、さんぼをしている人たちが左をあるっていて、ぶつかりそうになったことがありました。学校であるときは右がわ、じてん車にのるときは、左がわとおそわったのに、

「どうして、おとながルールをまもることができないのかな。」

と、とてもかなしいきもちになります。小学生でもできることが、なぜ、おとなができないのでしょうか。ぼくは、あいさつができなかったり、こうつうルールをまもれなかったりすると、とてもいやな気になります。

ぼくは、あいさつができなかったり、こうつうルールをまもれなかったりするおとなにはぜつたいになりたくありません。だからぼくは、げんきよくあいさつをまいにちしたいですし、じぶんのいのちをたいせつにするために、こうつうルールもしっかりまもりたいです。ちいきのおじいちゃんやおばあちゃんにも、あいさつをして心も体もげんきになってもらいたいですし、こうつうルールをまもってえがおでながいきしてもらいたいです。

ありがとうの気持ち

豊津小学校 三年

浅間琴羽

わたしは、豊津小学校という人数が少ない学校に通っています。わたしは今、三年生です。三年生は七人います。人数が少ないので、今は四年生といっしょに勉強をしています。ふく式学きゅうというそうです。はじめてのふく式学きゅうは、とてもドキドキしました。去年まで一しょに登校していたお姉ちゃんは、もう中学生になってしまったので、家ぞくの中で小学生はわたし一人です。さみしい気持ちとふ安でいっぱいでした。今年是一年生が入って来たので、うれしい気持ちもありました。でも、わたしの方が年上なので、しっかりしないといけないというプレッシャーもありました。いろいろとかんきょうが変わったので、わたしはともつかれてしまいました。いろいろ考えすぎてしまったのか、朝おきるとおなかがとつてもいたくて、まっすぐ立つことが出来ません。学校に行こうと思ってもおなかがいたくて、思うように体を動かすことが出来なくなってしまう。学校を休む日やほけん室ですごす日もありました。そんな時、ささえてくれたのが家ぞくや先生、友だちでした。家ぞくは、わたしの気持ちをよく理かいてくれました。先生は、家まで来てたくさん話を聞いてくれました。友だちは、ほけん室に来て声をかけてくれました。わたしは、みんなからの思いやりをたくさん感じました。みんなからのやさしい気持ちをもらって、わたしはどんどん元気になっていきました。先生や友だちのことも分かってくる、わたしの気持ちは楽になりました。

わたしは、体も気持ちも小さいです。でも、みんなのおかげで、小さかった気持ちは、大きくなれたような気がします。みんながいるから大じょうぶという気持ちになりました。わたしのことを大切に思ってくれ
るみんながいてくれて、わたしは今しあわせです。みんなに、「ありがとう」と言いたいです。

ぼくのひいじいちゃん

中野西小学校 三年

谷田川 伊織

ぼくのひいじいちゃんは、十年前に、にんちしようというびょう気になりました。

にんちしようになりはじめたとき、ひいじいちゃんは家ぞくのこと、日にちや、今が何時分かも分からなくなりました。そして、びょういんに行つて、くすりをもらつて、のみはじめました。

デイスービスに行つてもらうことに、きめて、さいしょのころは、デイスービスの車にのるのもいやがつていましたが、今はすんなり車にのるようになりました。週三日、デイスービスに行くのを楽しみにしています。

家にいるときは、すわつてねています。ぼくとときどきボールなげなど、しているときは、きげんが、よく、わらつています。きげんがわるいときは、おこつて、あばれたり、ないたりするときもあります。おふるは、デイスービスではいつてきますが、トイレに、行くときや、食事をするとき、家ぞくの手つだいが、ひつようです。

日に日に、ひいじいちゃんの、できることは少なくなつてきて、立ち

上がるのも一人で立つことができなくなりました。一年たつて、どんどんにんちしようが、進んでいくのを見て、ぼくは、にんちしようというびょう気はとてもこわいものだと思いました。

ぼくは、にんちしようというびょうきのが知りたくて、ママにしばらくももらいました。そしたら、六十五才いじょうの五人に一人がにんちしようになつていそうです。

家ぞくのが、わからなくなつてしまつたり、自分のことも、分からなくなつてしまうことは、ひいじいちゃん本人もとても、こわいのか
なと思います。でも、なおるびょう気ではないので、どうすることもでき
ないようです。

ぼくは、そんなひいじいちゃんを見ていて、大きくなつたらにんちしようの人も助けたいと思つようになりました。たいへんなことかも、しれないけれど、ぼくと、遊んでわらつてくれるひいじいちゃんを、見るのがとてもすきです。おとしよりが大すきなぼくは、たかさんの、おとしよりをえがおにしたいと思つています。

バリアフリーって何だろう

豊郷小学校 四年

谷田川 蒼

ぼくは最近、福祉やバリアフリーという言葉をよく聞きます。特に、バリアフリーについては、お母さんとスーパーに買い物に行つても、旅行で泊まつたホテルでも聞いたり見たりします。最初、ぼくは、福祉やバリアフリーは、ぼくには、関係のないことで、お年よりや障がいのある人が分かつていれればいいと思つていました。ぼくは、「バリアフ

リー」って何だろうと、あらためて考えました。

この夏休みに、ぼくはお母さんとかかりつけの歯科医院に行きました。歯科医院には、ぼくは半年に一度検診に行っています。小さいころから通っているのですが、歯科医院の待合室の風景は何度も見ているため、何も意しきすることはありませんでした。しかし、バリアフリーとは何かと考え始めると、今まで特に考えることもせず利用していた待合室の風景が大きく変わりました。まず、ちゅう車場から歯科医院に入るまでに、階段とそのなりに車いすが通るためのスロープがありました。このスロープがあることで、車いすを持ち上げることなく、スムーズに中へ入れます。また、げん関では、たくさんの手すりがあり、くつをぬいだりはいたりするときにお年よりが転ばないための工夫がありました。

他にも、待合室のいすの間かくは車いすが入れるスペースがあり、どんな人でも歯科医院を利用できるんだなと思いました。実際に、ぼくがお母さんと待合室で待っているときに車いすのおばあさんと、その介助をしている人が歯科医院に来ました。スロープを使って待合室に来るまでがとても自然で、歯科医院の職員の方々がどんな人にも利用しやすいように考えられており、あたたかさを感じました。何よりも、ぼくがもっとも感動したのは職員の方々のお年よりへの接し方と、行動です。職員の方々は、いつも笑顔でやさしいふんい気でお年よりに声かけをし、歩くのが大変そうな人には手をかし、一緒にゆっくりとならんで診察室まで歩いていました。ぼくは、お母さんに、

「この歯科医院の人たちってみんなやさしいね。車いすも通れて、バリアフリーだね。」

と言いました。そしたらお母さんは、

「誰でもふつうにできることではないよね。もちろん、ふつうにできれ

ばいいんだけど、他の人のことを考える気持ちがないとできないことなのよ。」

と答えました。その時は、あまり深く考えなかったけれど、今あらためて思うのは、「バリアフリー」とは物や施設が作り出すのではなく、人の心のあたたかさだったり、他の人のために何か助けになりたいという気持ちのことなのではということ。つまり、「心のバリアフリー」です。

ぼくは、これからの生活の中で、障がいがある人や、お年よりが困らないように生活していけるように、やさしい気持ちをもつことを心がけていこうと思います。

ふくし体験を通して学んだこと

中野西小学校 四年

肘井亮太

ぼくは、総合の授業で車いす体けんと点字体けんをしました。体けんをする前までは、車いすに乗ったり押したりするのは、かんたんにできると思っていました。

じつさいに、車いすを押すことと乗ることよりほうを体けんしました。車いすに乗ってみると、車いすはとても重たくて動かすことが大変でした。曲がりかどでは、タイヤをうまく回せなくて曲がりづらかったし、段差のある場所は、段差を乗り越えることができなくて、後ろから押してもらわないと進むことができませんでした。車いすに乗っていると、立っている時とくらべて、見えるけしきも変わるので、高い所にある物を取ったりすることも大変だと思いました。ふだん歩いている所を、

車いすに乗っていろいろすると、こんなに時間がかかってしまうんだと実感しました。そして、まわりの人達のサポートが必要だと思いました。

点字体けんでは、視覚に障がいのある人達の生活について知り、点字の役わりや、使用する道ぐや読み方、打ち方などを学びました。

点字は、視覚に障がいのある人達がさわって読む文字です。ぼく達が目で文字を読んだり、伝えたりするのと同じように、点字は目の見えにくい人や目の見えない人にとって大切なものです。

そして、日常生活の中に、たくさん点字サインがあることを知りました。ぼく達の身近な物の中では、ポンドや調味料の容器、リモコンなどに点字サインがありました。

点字は、六つの点の組み合わせで文字や記号を表しています。ぼく達は、点字器を使って、学校名、年組、名前を打つ練習をしました。小さなマスの中に点を打つことがむずかしくて大変でしたが、やっていくうちにだんだん早く打てるようになり、楽しくなりました。みんなで、点字名しを完成させた時はとてもうれしかったです。

ぼくは、ふくし体けんを通して、障がいのある人達が、ふだんぼく達が気付かない所で大変な思いをしていることが分かりました。そして、道ろやし設などのバリアフリーが、もっとふえてほしいと思いました。自分達だけではなく、こまっている人達の立場になって、みんなが安全にくらしていけるかんきょうになってほしいです。

ふくしとは、だれもがしあわせにくらせる社会になるように協力し合うことをいうそうです。

ぼくは、人に声をかけたりするのがあまりとくいな方ではないけど、こまっている人を見かけたら「大じょうぶですか？」と勇気を出して声をかけたいと思います。その声かけが、今ぼくにできる初めの一歩だと

思います。そして、声かけの輪が広がって、少しでもこまっている人達の手助けになればうれしいです。

私の左手のペンギン

豊郷小学校 五年

高野 茉莉子

私の左手には、茶色いペンギンがいる。気付いたらあった、私のしるし。私は一才のころ、手の平に大やけどをして、足の付け根の皮ふを手の平に移植する手術を受けた。その皮ふが、ペンギンのシルエットにそっくりなのだ。

この夏休み、私は左手の三回目の手術を受けた。一才の時のことは、自分では全く覚えていないけれど、今回も付きそってくれたお母さんから、その時のくわしい話を聞いた。初めて家族とはなれて過ごす入院生活は、家族も私とても辛いものだったそうだ。そして、いろいろな人の助けを受けたという。不自由な状態だった手を元通りにしてくれた医者さん。不安がる私をあやしてくれ、身の回りのお世話をしてくれた看護師さん。また、おじいちゃんおばあちゃんの家で留守番していた二人のお姉ちゃんは、まだ五才と三才だった。きつと両親とはなれてさびしかっただろう。お父さんは仕事をしながら、いつもならお母さんが担当する家事を全てやっていた。お母さんは東京のおばさんの家に泊まりながら、毎日面会時間の最初から最後までいてくれたそうだ。私がひどく泣くので、抱っこしたり、ベビーカーで病院のろう下を散歩したり、少しでも気がまぎれるようにあやしてくれたらしい。

今回の入院で、おどろく再会もあった。一才の時に看護学校の実習生

として、私のサポートをしてくれた方が、今看護師として働いていたのだ。私を覚えていてくれて、話しかけてくれた。私の成長にとってもおどろいていたのが印象的だった。私は何一つ覚えていないけれど、多くの人の温かなサポートを受けていたことを、今回の入院で実感できた。

お母さんは私の手を見るたび、後悔する気持ちになっていたそうだ。「できなくていい傷だったのに…。」と、どうかこの傷を気にしないで、明るく元気に生きていけますように…」と、毎日願っていたのだという。しかし、私は傷を全く気にしていない。それを伝えると、お母さんはとても安心していた。「願いがかなったんだね。それも『全く気にしてない』だなんてね。」と笑っていた。

私の左手のペンギンには、たくさんの方の思いがたまっている。気にしてもいなかったが、今回三度目の手術でその時の話をたくさん聞いたことで、特別に感じるようになった。最近、家族に対してイライラすることも増えているけれど、たくさんの方からサポートを受け、こうして何一つ不自由なく元気に生活できている毎日に、改めて感謝したい。そのことを、このペンギンを見るたびに思い出したい。

私のしるしは、特別なペンギン。たくさんの方に大切にされたことと、優しさがたまっているかわいいペンギンだ。

生活しやすい環境づくり

大同西小学校 五年

沼田 愛

お母さんとスーパーに買い物に行った時、遠くの方から松葉杖を使っている人を見かけました。私はお母さんに、「あの人、足けがし

ちゃったんだね、かわいそうだね。」と話しかけました。するとお母さんは、「どんなところがかわいそうなの？」と聞いてきました。私は「足、痛いし早く歩けないから、かわいそうだなと思って。」と答えました。すると、お母さんは、「確かに痛いのも早く歩けないのもいやだよね、でも、本当にかわいそうかな。」と予想外の答えが返ってきました。私は、お母さんの言っていることがよく理解できませんでした。何とも言わないでいるとお母さんは、「遠くの方から歩いてこなきゃいけない方が大変じゃない。」と言ってきました。私は少しだけお母さんの言いたいことが分かりました。身体が不自由な人が車を停めて良い所には、障がい者マークがついていない車が停まっています。障がい者マークがついてなくても、身体が不自由な人や妊婦さん等が停めていたのかもしれない。私は、少しでも身体が不自由な人にゆずってあげて欲しいなと思いました。お母さんは、整形外科の看護師をしています。患者さんから、買い物に行っても、車が止められなかったから大変だったと話をされたことがあると話してくれました。「一緒に出かける時、いつも駐車場、入口から遠いでしょ。」とお母さんが言いました。お母さんはいつも遠く、車がほとんど停まっていない所に停めていることに気づきました。お母さんは、患者さんが話したさりげない言葉を忘れずに行動しているんだと思いました。

何気ないお母さんとの会話から、わたしは気づいたことがあります。

それは、身体が不自由なことがかわいそうなのではなく、そのような人が、大変な思いをしながら生活しなくてはいけないことが、良くないことに気づきました。これからは、高齢者も増えていき、身体が若いころのように、動けない人もたくさん増えてくると思います。私は、そのような人が生活しやすい環境づくりをすることが、大切なのではないかと

思います。身体が不自由なことは、かわいそうではなく、不便かもしれない。そして、その人達が、いかに、不便と感ぜない生活が出来るかが、大切だと思ひます。実際に、その環境が整つても、その人の笑顔を私は見られないかもしれませんが、みんなが不便と感ぜなければ、笑顔になるくらしへの一歩に近づくのではないかと思ひます。

まほうの言葉

豊津小学校 六年

山やま口ぐち花か音のん

皆さんは、自分からあいさつをしていますか。あいさつを返してもらうとどんな気持ちになりますか。うれしくなったり、あいさつしてよかったな、と思うのではないのでしょうか。私も同じです。

私の学校ではあいさつ運動というものを行っています。当番の人が朝少し早く登校して校門の前に並び、他の生徒や先生達に元気にあいさつをするという活動です。皆、元氣よく返してくれるので、こちらも気持ち元氣になります。特に朝のあいさつは、その日一日の楽しいスタートをきるためのまほうの言葉だと私は考へていて、家族や友達、先生達と交わすあいさつはとても大事だと思つています。

私が五年生の時のことです。どの生徒も、あいさつの声が小さいのではないかと、学校の中で話が上がりました。どうしたら良いか皆で話し合ひ、まずは私達高学年が率先して大きな声であいさつしてみようということになりました。すると、低学年の子達もそれに反応するように自然と声が大きくなっていったのです。大きな声であいさつをしようとする、表情も自然と笑顔になり、やつてよかつたなと思ひました。

また、通学路のうちに、給食のパンを作つてくれている工場があるのですが、ちょうど下校中に仕事が終わるお兄さんがいます。私は登校班の班長なので、率先してあいさつをしていました。けれど、一度も返事が返つてくることはなく、声を大きくしてみたり、元氣よくしてみたりしましたが、いつも前を通りすぎて行つてしまいます。初めは少し不満に感ぜたこともありましたが、もしかしたら耳が聞こえない人なのかもしれないと思ひ母に聞いてみました。母はそのお兄さんのことを知つていて、耳は聞こえるけれどもコミュニケーションを取るのが苦手な人なんだと教えてくれました。そのことを知り、元氣な声を出すのではなく、お兄さんの視界に入つて笑顔であいさつをしてみようと思ひました。工夫することで、学校のあいさつ運動のように自然と返してくれるようになるのではと考へたのです。もちろんすぐに返してくれたわけではないし、おどろかせてしまつてゐるのではと心配もありましたが、あきらめずにあいさつを続けていたある日、言葉ではなかつたけれど、おじぎをしてくれたのです。とにかくうれしくて、あたり前だと思つていたことだけでもこんなにも心が温かくなることなんだと感ぜました。

あいさつはとても身近な言葉だけれども、相手も自分も幸せになる。やつぱりまほうの言葉です。これからも気持ちの良ひあいさつをしていきたいし、気持ちの良ひあいさつを返したいと思ひます。

命の大切さについて

中野東小学校 六年

森 もり 下 した ゆりあ

私は、昨年ひいおじいちゃんを亡くしました。ひいおじいちゃんが亡くなる時に、とてもきちような体験や経験をしました。ひいおじいちゃんは、元気な時には毎年、一緒にお墓参りに行ったり、買い物に行ったりしていました。船に乗って魚をとる漁師だったので、魚の話や、戦争を小さいころに体験していたので戦争のお話などもしてくれました。いつも元気で優しかった、ひいおじいちゃんは、今年の八月にごはんが食べれないと言い出し、九月に病院へ行って、そのまま入院してしまいました。くわしい病気の原因は、あとからお母さんに教えてもらいました。コロナウイルスがまだ流行していたので、子供は面会に行くことが出来ませんでした。とちゅうで、転院もしたりしました。結果は「胃がん」で、余命三ヶ月でした。他のぞうきにも転移していたそうです。「がん」という言葉を聞いただけで、とても重い病気だということが分かりました。ひいおじいちゃんは、

「どうせ死ぬなら、家で死にたい。」

と、お母さんや家族、病院の先生に言いました。家族などで話し合い、ひいおじいちゃんの希望を叶えてあげようということになりました。家で「みとる」ために、準備などが始まり、お母さんなどは、いつも忙しそうにしていました。十月十日、ひいおじいちゃんは退院してきました。その日から毎日、点滴の交換や酸素マスクの確認など、お母さんは泊まりこみでやっていました。私も夜などは、ひいおじいちゃんに会い

に行きました。訪問かんごしの人ともお話をしました。コロナで病院にいる方はさみしいし、その中で亡くなってしまいう人もいるから、ひいおじいちゃんは幸せだよと言ってくれました。お母さんに「みとり」の話を聞くと、夜中も順番でねずに呼吸しているか確認したり、サチュレーションという体の酸素のう度を計ったり、せき込んでしまわないように、体を動かしたりしていました。何度も山をこえて、ひいおじいちゃんは頑張っていました。十月十六日の早朝四時みんなに見送られて、息を引き取りました。耳は最後まで聞こえるんだよ、かんごしさんが教えてくれてたくさん話しかけました。亡くなってしまってから、お母さんやおばさんに話をきくと「みとり」をやって良かったと言っていました。命と向き合い、自分が出来ることを、誰かのためにすることは、とてもすごいことだと思えます。ひいおじいちゃんに教えてもらった命の大切さ、戦争の怖さ、物や人を大切にすること、これから自分が大人になってからも忘れずにいたいのです。どんな人にも、その人に家族や親、大切にしている物があると思います。他の人の気持ちを考えられる人、誰かの役に立てる人になっていきたいです。戦争のない平和な世界になるように願いたいと思いました。



優 秀 (中学生の部)

自分らしく

鹿島中学校 一年

有^{あり}本^{もと}仁^に胡^こ

夏休みのある日、宿題でもやりますか！なんて取り掛かろうとしたら、母が「百貨店に行きたいから一緒に行こう。」と誘って来ました。「何か買うの？」と聞くと、「化粧品を買いに行きたいの。」と母は言いました。

私は少し迷いました。だって出かけるのはうれしいけど、百貨店は大人な感じで苦手なのです。正直、ショッピングモールの方が良かったなあと思いつつも暇だし行くことにしました。

百貨店に着いて化粧品売り場に行くと、色々な化粧品が並んでいて、販売員の方も店によって違う雰囲気だと感じました。

母は、目をキラキラさせながら私に「可愛く無い？」って尋ねてきます。

私も「うん、うん。」とうなずきます。

でもドラッグストアの化粧品売り場のように、触ったり試したりするのはなぜか緊張してしまって母の一步後ろで見えていました。

母がお目当てのお店に着き商品を見ると、販売員の方が優しい口調で声をかけてきました。「気になる物がありましたら、ご案内させていただきます。」

母は「ありがとうございます。お願いします。」とワクワクした声で答えました。

私は周りをキョロキョロしていたので、二人の会話だけ聞いていて、母が勝手に案内された時、私はビックリしたのです。

その販売員の方は男性だったのです。

でも女装をしているわけでもなく、ただ可愛くメイクをしている男性だったのです。話し方もただただ丁寧で柔らかい口調なだけで声のトーンも男性でした。

母に商品の説明をしている目はキラキラしていて、それを聞いている母もキラキラした目をしている気がしました。

私は間近でメイクをしている男性を初めて目にして正直ビックリした気持ちになり釘付けになりました。だって男性がメイクをしている姿ってテレビに出て女装をしている人や、男性アイドルがパフォーマンスをしている時しか見たことがなかったからです。

私の動揺した気持ちとはべつに、販売員のお兄さんは淡々と化粧品の説明をしています。その丁寧でキラキラした接客は動揺していた私までキラキラしてしまう勢いです。

数分前まではビックリして動揺していたのに、いつの間にか私は、お兄さんのアイシャドウ可愛い、なんて思っていました。ネイルもして、本当に似合っていたし、可愛いと思いました。

さっきまで男性がメイクをしているってビックリした気持ちなんて忘れていました。

お兄さんは母と楽しそうに化粧品を選んで母も満足そうです。

母は帰り際、お兄さんに「もう可愛い。」と言っていました。

お兄さんはうれしそうな声で「ありがとうございます。」と答えまし

た。

私は母に「男の人だったね。」と言いました。

母は「そうだったね。私が若い時は男の子なんて販売員に居なかったから時代だよね。」とサラッと言いました。

今の時代はLGBTQや男女差別をしないなどの問題に積極的に向き合っている時代だと思います。

そして今回、私が思ったのは女性が多い職業の世界で自分が好きなことを仕事にして頑張っているお兄さんがとても格好良くキラキラして見えました。

きっとお兄さんも差別や偏見など感じる時があるかもしれないけど、自分がやりたいことをやるって素敵だと感じました。

皆んな色々な個性があっていいんだなと肌で感じられた気がしました。

そして、皆んなと違っていいんだよって、皆んなと違う自分を恥ずかしがらずに大事にする気持ちも大切だと思いました。

最初は気持ちのがのらなかった買い物だったけれど、心に響く一日になりました。

みんながえがおになる暮らし

鹿野中学校 一年

堀ほり川かわ來ら姫ひめ

私には今、寝たきりの家族がいます。それは曾祖父です。私の曾祖父は腎臓が悪く、透析治療の為、週に三日病院に通っています。透析治療

とは、血液をいったん体の外に出して、機械を使って、一回当たり四から五時間程度かけて、きれいになった血液を体の中に戻す治療法だそうです。透析は腎臓の機能を回復させることはなく、途中で腎移植を受けない限りは、生涯続ける必要があるそうです。それを知った時、私は一生その病気とともに生きていかなければならないことで、この先の不安な気持ちと恐怖でいっぱいになり、受け入れることすら自分だったらできないと思いました。とてもショックで悲しい気持ちになりました。

曾祖父がまだ透析に通う前は、趣味の釣りをしたり、田んぼ仕事をしたり、曾祖父はいつもどこかに出掛けて楽しんでいたのを覚えています。初めは週一回で透析に通っていました。その頃はまだゴルフでホールインワン賞をとるほど元気な様子でした。週二回で通うようになった時でも、私や兄の小学校の送り迎えをしてくれたり、試合の応援にきてくれたり、家族でバスを借りて旅行に行ったりもしていました。しかし、週三回通うようになった時には、近所をウォーキングしたりすることはあっても、車の運転は難しくなり、自分の趣味などもすることができなくなっていました。歳を重ね、透析に行く回数も多くなるに連れて、さらに悪化し、今では歩くことも誰かと一緒に進めないようになってしまいました。病院に行く時も、少し前までは、杖を使い自力で乗車できていた曾祖父ですが、今は、家族の肩を借りなければ、車に乗れません。病院に行く時以外は、家の部屋のベッドで寝たり、リビングの座椅子に座っています。

私は小学五年生の授業で、福祉について調べる学習をしました。その際に、加齢にともなう筋力の低下をおもりを付けて体験している学校があることを知りました。その体験を通して、普段は気にならない距離がとても長く感じたそうです。そんな日常生活を送る上での不便さを、曾

祖父は透析に行くことと常に体感しているとなると相当な負担がかかっているのだと改めて感じました。そんな中、曾祖父は本当はとても辛いはずなのに、家族を思っただけでなく、曾祖母は車の免許をもっていないので、出かける時や買い物はいつも曾祖父の運転で出かけていました。

曾祖母も私たちの前ではいつも笑顔でいますが、生活の環境も変わり、きつと辛い思いをしているんだろうなと感じています。そんな曾祖母に、いつまでも元気でいてもらいたいと、車の運転はできなくても、中一の自分でもなにか手助けにならないか考え、曾祖父の介護をしている家族の手伝いを少しでもしようと思いました。田んぼ仕事や庭の草抜き、曾祖父が車に乗る時や移動する時には肩をかし、支えてあげることなど体を使って手伝えることは進んでやり、老化現象が進み、自身の体温調節も難しくなってきたと聞いたので、休んでいるときは寒いか暑いか聞いたりしながら、部屋の温度を調節してあげたり、近くの欲しいものをとってあげたりなど曾祖父の気持ちに寄り添って、できることをどんどん考えていきたいと思っています。それ以外に自分に何ができるんだろうと両親に相談すると「じいちゃんに毎日話しに行くことかな」と言われました。

私たちと話すだけで健康寿命が延びると聞いたので、私はなるべく話をしに行こうと思いました。自分に今できることを考え、探す、これらなことを今後も続けていきたいと思っています。

ペースメーカーを理解する

平井中学校 二年

神 じん 芽 めい 桜 さ

私がこのテーマにしたきっかけは、祖父がペースメーカー使用者だったからです。ペースメーカーとは、脈拍が遅くなってしまうたり、一時的に止まってしまい、めまいや失神、心不全がおこる不整脈を持つ心臓の働きを助ける機器です。あまりペースメーカーという言葉を書くことがないのですが、調べてみると約25万人がペースメーカーを使用していることがわかって自分の身近にもある医療機器だと分かりました。ペースメーカーなどの体の中にある医療機器を使用している人だと、ひと目見ただけでは、分からないことが多いですが困っていたらすぐに助けることが大切だと私は思っています。

私の祖父は、ペースメーカーを3年半前から使用しており、些細なきっかけで使用することになったと言っていました。使用している時は痛みを感じないようですが、心不全の状態になるとせえせえして苦しいことがあると言っていました。祖父は普段通り生活を送っているけれど、心拍数を上げることが出来ません。例えば階段を登ったり降りたりすることです。使用する上で注意していることや注意しなくてはならないことを聞くと電子機器を扱うのに皮ふに直接触れるものは使用を控えていることや、電気風呂に入らないことや、ペースメーカーが入っているところは強くこすらない、磁器類を装着部分に近づけないことなどたくさんあり日常生活を送るのにも不便だと感じました。しかし自動車の運転をすることが出来るところは良いと思いました。ペースメー

カーを入れても祖父に変わった様子はないように感じていましたが、祖父自身は普段できたことができなくなったり、不便になったりして大変な毎日を送っていると考えたと自分にもなにか出来ないかと考えました。私は祖父と離れて暮らしているので、直接的な手伝いはできないので、自分の知識を高めるところから始めようと思いました。調べてみると、ペースメーカーは電子機器を扱うのに注意が必要だし、MRIをとることができないことが分かりました。ペースメーカーを使用している人はペースメーカー手帳を持っているので、緊急時には自分がペースメーカーを使用していることが分かってもらえるように持ち歩いているようです。またAEDを使う時に除細動パッドをペースメーカーの真上に貼り付けないようにすることを忘れないようにし、すばやく応急処置や¹¹⁹番通報などをするのを心がけたいと思います。たくさん注意しなければならぬことがあるので、早く理解できるように、もっとペースメーカーがどのようなものなのかを多くの人に理解してもらいたいです。

私は身体障がい者だけでなく心臓機能障がいなどペースメーカーを使う人達のことをもっと考えられた公共物や不便を解消したりできるようなものができたらいいなと思っています。祖父にまた会う機会があった時には今回学んだ知識を活かして、手助けできることをたくさん行いたいと思います。ペースメーカーを使用している人がもっと暮らしやすいようにするために、自分が今できることを積極的にいき、困っている人を助けられるようにしたいです。

住みやすい街づくり

大野中学校 二年

小松崎 こまつざき 海 か 乃 の

みんなが笑顔になる暮らしといったらどのようなことを思い浮かべますか？私は、住みやすい街づくりやみんなの意見の尊重、思いやりの心を持つことだと思います。なかには障がい者だからといって差別されている人がいます。住みやすい街づくりと言えば、障がい者や、高齢者に不便がないようにすることだと思います。そこで私は、みんなが笑顔になれるような暮らしができるようにするために、自分たちができることを考えました。

みんなが笑顔になる暮らしに一番大切なことは、住みやすい街づくりをすることです。私は、障がい者や高齢者にとって住みやすい街とはどのようなことか気になり調べてみたところ、障がい者への接し方やマナーがあることを知りました。人権が尊重され、誰もが不公平なく幸せに暮らすことができる街だということが分かりました。私たちが暮らす街には、障がいの有無に関わらず、年齢や性別の違いがある様々な人がいます。そのすべての人が自己主張もでき、他人の意見も尊重できるところを大切に、みんなが住みやすい街づくりをすることが大切です。例えば、視覚障がい者に対して私たちができることは、目の前に看板などがあったときには「前方に看板があります」など声を掛けたり、車椅子の人に対しては、ちよつとした段差でも大変なので、「お手伝いしましょうか？」などと一言声を掛けてあげることです。

平成二十八年四月に施行された障害者差別解消法は、障がいを理由と

した差別をなくし、共生社会をつくることを目的としています。しかし、今の社会には、さまざまなバリアがあります。そこで一人ひとりが、バリアから生じる困り事をどうすればなくせるかを考えました。例えば、社会にあるバリアの例として、電車やバスなどに乗るために並んでいる列が進んできていることに気づかない場合があります。その場合は「もう乗れますよ」と声を掛けると視覚障がい者の方も安心して乗り物を利用することができます。また車椅子を使用している方は、自動販売機など高い位置での機械の操作、棚の上のものを取るなど手が届きません。そのような時は、代わりにとってあげることが大切です。

今の社会には車椅子を使用しても手が届くような自動販売機を見かけることがあり、バリアフリーを意識した工夫がされています。私は中学一年生の時に福祉体験を行い、普段から登っている階段も「みえない」状況に腰が引けて、足がすくんだりしてとても怖かった思いをしました。あと何回登れば終わりなのか、いつ右や左に曲がるのかがわからないとても不安な状態でした。しかし、隣にいるパートナーが、「あと1mで右に曲がります」などと常に声をかけてくれて安心できました。福祉体験を通して、視覚障がい者とパートナーとの信頼関係や具体的な声かけが大切だと思いました。また、パートナーとの信頼関係を保つためには、自分以外の人のために気遣いをしたり、相手の立場になって考えてみたりという思いやりが大切だと思いました。視覚障がい者は、点字ブロックを白杖でたどって道の案内や止まれるの合図などを探しています。よく街なかでは点字ブロックの上にゴミやものがのっけていることがあります。そのことよって白杖で突いたときにわからなくなってしまうます。もし、点字ブロックの上にもが置いてある場合、自分からゴミを拾ってあげることができます。また、ポスターを作り、点字ブロックの

上にものを置かないようにと呼びかけをすることもできると思います。みんなが笑顔になる暮らしには住みやすい街づくりをし、思いやりの心をもつことが大切だと思いました。また、住みやすい街づくりにするには、自分から積極的にボランティアに参加することも大切です。

おじいちゃんと運転免許

平井中学校 三年

おおみやちひろ
大宮千尋

「次の運転免許の更新をやめようと思っている。」おじいちゃんは、しばらく前から言っていた。

おじいちゃんから免許返納の話聞いたとき、私は少しびっくりした。おじいちゃんは、これからも車の運転をしていくと思っていたからだ。

両親が共働きだったので、児童クラブの迎えはいつもおじいちゃんだった。習い事の送迎もおじいちゃんがしてくれた。おじいちゃんは確かに高齢だけど、畑仕事に精を出し、家族が心配するぐらい高い庭木の手入れも、みんなが止めるのも聞かず自分でやっていた。そんな元気なおじいちゃんだが、ここ一、二年は、「身体が痛い」と言っていて、マッサージジエアーに座って居眠りをしてることが多くなった。だから免許返納すると聞いたときは少し驚いたが、おじいちゃん自身が体の衰えを感じているのかなと思った。

そんなおじいちゃんが、

「やっぱり運転免許がないと不便だな。」

と言い出し、運転免許の更新をしようかと言い出した。私も両親も寝耳

に水だ。てつきりおじいちゃんの気持ちは固まっていると思っただらだ。

私はなぜおじいちゃんが迷っているのかを考えてみた。

おじいちゃんをよくお昼ご飯のお弁当を買いに行く。母がお昼の準備をしているけれど、それには手を付けずに車を運転して買いに行ってしまう。おじいちゃんにとって、何にしようかと迷いながら買い物をするのは、気分転換になっているらしい。それに、お店の中を歩くのはいい運動になっていると言っている。

おじいちゃんは、次の免許更新をしないと決めてから、買い物や病院に行くのにどんな手段があるのかを調べていた。一番よく聞くのはコミュニティバスだ。バスに乗れば、普段買い物をしているお店や病院、市役所にも行ける。でも、バス停は家から少し離れたところであり、おじいちゃんが歩いていくのは大変そうだ。タクシーを使うという方法もあるが、自分の好きな時に出かけられないのが不便だ。

今までおじいちゃんは何十年と車を運転してきたので、車のある生活が当たり前になっている。車のない生活に不安を感じているようだ。

私は、おじいちゃんが運転免許を更新することについて、複雑な気持ちだ。車の運転ができるということが、おじいちゃんの自信につながっていると思うからだ。だから、車が運転できなくなってしまう時に、おじいちゃんの元気がなくなってしまうのではないかと少し心配だ。しかし、これからおじいちゃんの体力や認知機能はだんだん衰えていくだろう。大きな事故を起こす前に、免許を返納してもらいたいという気持ちもある。

高齢者の交通事故ニュースを見るたびに、お年寄りや車の運転なんかしなきゃいいのに、と思っただけだ。けれど、おじいちゃんが免許を返納

するかもしれないというときになって、初めて、一人ひとりいろいろな事情があったり重みがあったりして車の運転を続けているのだと気が付いた。おじいちゃんの免許返納は、まだ決まっていない。でも、おじいちゃんなら、危ないと思っただけで自分から免許を返納するだろう。私は、そんなおじいちゃんを、家族みんなでサポートしていきたい。

福祉のある世界のために

鹿島高等学校附属中学校 三年

安藤 亜佑人

一昨年の三月、父は仕事での事故で怪我をした。

その日は、朝早くに母のスマートフォンに着信があった。私は珍しいと感じたが、あまり気にしなかった。しかし、母は電話に出ると突然声色を変えた。父の名義でかかってきた電話からは父ではない人の声が出てサイレンなど沢山の音が入り混じった音がしたと母は話していた。母が「今すぐ支度して出るよ。」と急に私と妹に言ったときは何が起こっていたのかよく分からなかった。病院につくと、母は私たちに車で待つていろとだけ伝え、一人で病院の中に入っていった。

父の容態がわかったのは、応急処置が終わって車に乗ったときだった。私は信じられないと思った。今にも垂れ落ちそうな頬、体の至る所に残る血痕。こんな状態で帰されるのはあり得ないと。当時はコロナ禍で、病床数がひっ迫してすぐに入院というわけにもいかなかったと思う。 「何故こんなことになってしまったのか」という疑問、それと同時に母に対して「これほどの怪我で何故にも説明しないのか」と怒りが湧いた。

父は家で数週間を過ごした後、少し離れた大きな病院での手術が決まり、その前に入院した。手術までの間、母は片道一時間はかかるその病院まで何度も通った。土日は私と妹を連れて行ったが、母が病院に行く間は私と妹はずっと車の中にいた。それは小学校卒業を控える私には長すぎる時間だった。それに私たちは父の容態や事故の原因を知ることがなく、時間だけが過ぎていった。

父の手術は私が中学校に入ってから行われた。私は中学受験をして、小学校からの同級生の少ない真新しい環境に慣れることに必死で、父のことを気に掛ける余裕は無かった。卒業式、入学式には母が出席した。父が家に帰って来ると関係者や警察などが家に来た。

しばらくすると事故の原因が分かってきた。どうやら父自身が原因というわけではなく、職場での欠陥がありそれが事故を招いたという。私は「そんなことがあったのか」と思い、話を聞き続けていた。

話を聞いていると、父は事故を引き起こしてしまった人が家に来たという話をした。当然私はその場に同席しなかつたので「その人が憎いと思ったことがないのか」というような内容の質問をした。父の返答は意外なものだった。

「事故はいつでも起きる可能性があった。」訴訟できる可能性もあったそうだが、これを理由にその必要はないと判断したそうだ。

私は父の寛大さに気付かされ、驚いた。日常生活では感じられない父の寛大さがそこにはあった。

また、事故を機に母の優しさにも気付かされた。母は私に事故や父の容態について一切口にしなかつたのは自分が中学校に進学する大切な時期なので、心配させたくなかつたからだと答えた。母は私が小学校の同級生が少ない中学校に進学することにナーバスになっていたのを氣遣っ

てくれていたのだ。その時期に入卒の準備や私のサポートをしてくれていたことを考えると、改めて頭が上がらないような気持ちになる。

私は父の事故を通して、私の知らない両親の優しさというものを学んだ。事故の原因となった人を許すのは当事者にとっては簡単なことではないと思う。中学校に進学する私と怪我をした父の二人をサポートしながら生活した母はどれだけ大変だったのだろうと思った。しかし、両親には共通して「相手を思いやる心」があったと思う。

現代の社会には「相手を思いやる心」が足りないと思う。しかし、父と母を見て「相手を思いやる心」は「福祉のある世界」の完成に前進すると、私は考えている。

優 秀 (高等学校生の部)

差別のない社会をめざして

鹿島高等学校 一年

うち の きょう こ
内 野 響 子

新聞を読んでいたら、とある記事に目がとまりました。それは、神奈川県相模原市で八年前に起きた、あの恐ろしい事件により娘を失った母親の思いが語られた記事でした。

相模原障害者施設殺傷事件とは、二〇一六年七月二十六日に障害者施設「津久井やまゆり園」で発生した大きな事件です。やまゆり園の元職員である男性が刃物を持って施設に侵入し、その施設の入所者と職員の

計四十五人が刺されました。施設の入所者のうちの十九人が亡くなり、その他の入所者、職員合わせて二十六人が重軽傷を負わされるなどというとても悲惨な結果を生みました。

新聞には、自閉症である十九歳の娘を一瞬にして奪われた母親の、娘との生活や思い出、そして事件に対する思いが書かれていました。

「娘を育てるのはすごく大変だったけれど、好きな音楽に合わせて踊ったりして楽しむ様子はとても可愛かった。」

というようにことが述べられていたのを読んで、こんなにも人に愛された生活を送っている人たちが、なぜ障がいがあるという理由だけで命を失わなければならないのか疑問に思いました。

社会に大きく影響を与えたこの事件の犯人は、「意思疎通のできない重度の障がい者は社会に不要だ」と考え、犯行に及んだということをお口にしていたそうです。彼はこの殺害を正義だと思っただけでいたことにごく驚きました。障がいがある分人に迷惑をかけてしまうことはあると思いますが、それが良くないこととは思いません。誰でも生きていく以上、人に迷惑をかけています。障がい者も含めいろいろな人がいることで幸せが増えることもたくさんあります。私は、障がい者はむしろ社会に必要な存在だと思っています。

もう一つ驚いたことは、この事件の被害にあわれた施設の入所者の一人であった、尾野一矢さんの行動です。事件当時、尾野さんは犯人に刃物で首などを刺され重傷を負っていました。犯人が逃走した後、施設の職員たちは警察に通報しようとしたのですが、犯人により結束されていて動けない状態でした。そこで職員の一部が尾野さんに携帯を取ってくるようお願いしました。首の傷みを我慢しながらも、尾野さんは必死にリビングから携帯を取ってその職員に渡し、警察に通報することができま

した。私は、そんな彼の活躍こそが本物の正義だと思っています。彼がいなかったら、通報が遅れて、もっと多くの人が亡くなっていたかもしれない。こんなに危険な状態でも、職員と意思疎通を行い多くの命を助けることができました。これは、犯人の言っていた「意思疎通のできない障がい者は不幸を生む」という言葉をくつがえすものです。尾野さんのように障がいがあっても、人の役に立つことはできるのです。

障がいは、生まれ持った個性であり、その影響により一人ではできないことが多くあると思います。しかし、それを悪いことだと決めつけずに、周りの人が支え合うことでより良い社会になります。障がいのある人となない人がいるのは、背の高い人と低い人がいるのと同じだと私は考えます。背が低い人は高い所にある物を取るのに、背の高い人の助けが必要になります。障がい者も同じで、困った時は障がいのない人の助けが必要です。自分とは違うものを嫌ったり排除しようとするのではなく、違いを個性として認め、自分もその立場になって考えるべきだと思いました。

今でも障がい者に対する虐待や差別はなくなっています。これ以上差別に命を奪わせないためにも、この事件で失った命を無駄にしないためにも、社会が変わっていくことを心から望みます。

祖父との約束

鹿島学園高等学校 一年

荒井 二葉

「今度、ラーメン食いに行こう。」

八十三歳の祖父は会うたびに、いつもと同じイスに座って、ご飯に

誘ってくる。しかも毎回ラーメン。よっぽど祖父の大好物なのだろう。けれど、七十八歳の時に免許を返納している祖父は私を連れていくことは出来ない。それでも私はずっと祖父と外食に行くことを心待ちにしていた。

そんなある日、祖父が段差につまずいて転倒してしまった。病院で検査した結果、足を骨折していた。そこから、手術を受けた。無事成功したが、前のように歩くことは難しい。今は介護施設でリハビリの真っ最中だ。こうして祖父は介護が必要となった。これをきっかけに叔母が介護職に就いた。私にとっても今まで馴染みの無かった介護が急に身近に感じてきた。

介護の仕事について良く知らなかった私は叔母に仕事について色々な話を聞いた。例えば、やりがいは、利用者さんとの会話やお手伝いをした時に、「ありがとう」と言われた時に感じるそうだ。実際に、祖父を車いすに乗せるお手伝いも出来るようになっていて、自分の家族にも介護の知識を生かして、関わっていることに、すごく良いことだと思ったり、自分も持っていたい知識だと感じた。反対に、大変なこともある。それは、相手が人だから、相手に自分の言葉が伝わらなかった時のもどかしさがあるそうだ。また、高齢化社会が進んでいることによる、介護職の人手不足や介護に関する知識の勉強もとても大変そうだ。祖母はこの話をしながら、たくさんの参考書を見せてくれた。そこには、全然聞いたことのない認知症の種類が書いてあった。そこで私は、本当に介護、または、高齢の方の辛さを表面しか知らないんだと思った。高齢者をもつ障がいには、人それぞれだし、介護をする側も、症状が異なる分、対応の仕方もそれぞれ変わる。にも関わらず、どんどん進んでしまう少子高齢化。とても深刻な問題なのだと改めて感じた。しかし、施設にい

る人は元気に暮らしている。祖父もリハビリ中、大変そうだけど笑顔が見えた。その笑顔で私も自然と口角が上がった。人と人が支え合い、笑顔が生まれることに感動した。

福祉についても少しだけ調べてみた。すると、知らなかったことが出てきた。それは、福祉には社会福祉と保健医療福祉という福祉があり、高齢者や障がいのある方、児童、ひとり親などへの支援のことだけではなく、保健医療・公衆衛生に関する制度やサービスのことも福祉の一環であるということだ。だから福祉はずっと私の身近にあるものだったんだと気づいた。他にも、障がい者という言葉を書く時は、「害」という字を使つてはいけないということを知った。絶対に害である人はいない。だからこそ、このひらがな表記への変更はとても良いことだと思う。

今回、この作文を書くにあたり、福祉と介護についてたくさん学ぶことができた。私の母や兄だつていつかは年をとつてしまう。もちろん私自身もだ。そう考えると、今回の様に若い世代の私のような人たちが福祉について学ぶのは良いことだと思う。だから、将来的に介護職や福祉制度が充実してほしいなと心から思った。

きっと今こうして私が作文を書いている間も祖父はリハビリを頑張っている。早くあのイスに戻つて来てほしい。いつかまた一緒にラーメンを食べられますように。

個人の尊重の優しさ

鹿島高等学校 二年

藤井優姫

福祉作文を書くにあたって、私はとあることを思い出した。最近、インターネット上で活動を行っている私の好きな配信者の方が、「トロッコ問題」について話していた。「トロッコ問題」とは、簡単に言ってしまうえば、正解のない二択のどちらか一方を選ばなければならない、というものだ。例えば自分の大切な人を一人助けるか、赤の他人を五人助けるか、などがある。

福祉作文と「トロッコ問題」は一見すると何にも関連性がないように思える。しかし、私は、双方には「個人の正義」なるものがあるのではないかと考えた。福祉作文では、人と人との関わり合いや優しさについてのテーマが多く見受けられる。私は、それらのテーマは、一貫して「個人の正義」があるのではないかと思った。

「トロッコ問題」も、自分の心や考え方に従い、己の答えを導く。これもある種、「個人の正義」であると考えても良いのではないだろうか。「個人の正義」について私が深く考えるようになった理由は、日常によくあるような小さな出来事だ。

私は、数年前に仲の良い友人同士がけんかをしてしまった場面に遭遇した。互いの意見の対立から、関係が悪くなり、大きなけんかへ発展してしまったのだ。

一人の子が、友人に隠しごとをしていた。その子は、周りの友人から見るとひどく辛そうに見えていた。周りの友人のうちの一人から話すよ

うに頼まれたが、それを拒否してしまった。話して余計に心配されたくなく、隠していたからだ。しかし、そのような理由を知らない友人からすれば、なぜ話してくれないのか理解できなく、結果的に対立してしまっただけだ。

正直なところ、私は双方に落ち度があったのではないかと思う。隠しごとをしていた子は、友人から気付かれているならば、心配をかけると思う前に、全てでなくても良いから話してみれば良かったと思う。友人の子は、心配な気持ちはあれど、「隠す」にはそれ相応の理由があるはずなため、一度冷静に相手が少しでも話しやすいようにしてあげる必要があったと思う。

しかし、双方共、相手のことを思う気持ちがあったため、このようなことになったのだと思う。

双方に、相手に対する優しさがあり、その行動を取ろうと思うのは、自分の正義がそうするべきだと思ったからに他ならない。

私は、この二人のどちらも間違ったことはしていなく、お互い正しさをぶつけ合っただけだろうと思った。

この話から私は、「個人の正義」について考えるようになった。よく考えれば、人が争う理由は大体これが関係しているように思える。戦争は、自分たちが守りたいものは守るため、行わざるを得ない。

結果的に、自分の正義は、対立相手からすると悪なのだ。しかし、私はそれを相手に押し付けるべきではないと思う。

私は、「個人の正義」をしつかり心に刻みその上で次は、相手の正義に対して目を向けることが大切だと思う。そうすれば、遠い未来では、争いが起こっても、いつかまた、手を取り合い、共に歩んでいくことができるのではないかと、思っている。

福祉とは

鹿島学園高等学校 二年

渡邊 柚花

福祉という何を思い浮かべるでしょうか。私は、高齢者や障がい者に対する支援等のことを思い浮かべました。しかし、福祉にはそれ以外の支援・意味があります。

高齢者・障がい者への支援以外には「ひとり親」世帯への支援があります。現代の日本では、家族のあり方の多様性が現れ始めたことよって、母子家庭及び父子家庭が増加しているそうです。実際、私が中学生の頃に仲良くしていた子で、母子家庭で三人兄弟の長女である子がいました。その子はとても明るく学校生活では積極的に前に立ち、誰よりも係や委員会の仕事をしてくれる優しく友達が多い、素敵な子でした。私は彼女と中学二年生から同じクラスになり、毎日楽しく過ごしていました。ですが、とある日から、彼女はあまり学校に来れなくなったり、遅刻することが多くなりました。その理由はある病気でした。

彼女が患っていたのは「過敏性腸症候群」という病気でした。一見軽そうだと感じる人もいるかもしれませんが、彼女はそれにより激しい腹痛、痛みによる睡眠不足、吐き気など様々な症状を発症していました。私は原因が気になって調べてみると、ストレス・不安や自律神経の失調などでした。前々から彼女とはよく悩みを相談し合ったり、愚痴をお互い言ったりしていたのにストレスが原因、と知り、私はさらに心配がつのり、担任の先生と彼女のことについて話しました。すると、担任の先生から彼女が家のことで悩んでいることを知らされました。彼女は先生

に、私にだけは教えてもいいけど余計な心配をかけたくない、と書いていたそうで私はとても悔しかったのを今でも忘れることができません。家のこと、と言うと、親が仕事で忙しいから家事を手伝ったり、弟や妹の面倒を見たり、それに加えて自分の勉強をしたり部活に行くなどたくさんやらなければいけないことで体も心も疲労が溜まり切っていたようでした。

彼女のように、親の代わりに様々なことで手いっぱいになってしまいうような子が今の日本にはたくさん存在しています。ヤングケアラーという言葉もよく耳にしますが、そのような子をつくり出さないためにも、ひとり親世帯に対する支援にもっと目を向けるべきではないでしょうか。

現在、日本ではひとり親世帯の五割が貧困とされています。支援としては、児童手当や児童扶養手当、児童育成手当など、思っているよりも多くの種類の救済措置が政府によって行われています。また、子育て・生活支援については、ヘルパーの派遣、保育所などの優先入所等があります。

そんな支援が行われているのにも関わらず制度を知らず、利用できていない家庭があることで、子どもへ負担がかかってしまっているのだろう、と私は感じました。当事者でなくても少なからず周囲には悩みを持つているシングルファザー、そしてシングルマザーがどこかにいるのは確実です。その人自身、きつと自分の仕事、子どものこと、それ以外でも頭がいっぱいになってしまっているでしょう。そんな人達を救えるのは、行政または職場などあるかもしれませんがそれだけではなく、私たち一人一人の知識や視野の広さ、ひとり親に対する偏見をなくし、相談しやすい社会をつくることだと思います。

少しでも多くの人が社会に対する見方を改めて考え直し、偏見をもたずに生きれば、もっと幸せで温かい世界がつかれるでしょう。

【佳作入選作品】（小学生の部）

みんながえがおになるくらし	波野小学校 一年	菅原 未来
プラスのことばでみんなしあわせ	鹿島小学校 一年	坂本 照磨
おじちゃんのがっこうへ	大同東小学校 一年	鎌田 紗英
たいせつなおしごと	大同東小学校 一年	岸田 空優来
いろいろなマーク	大同西小学校 一年	田中 康介
わたしがみんなのためにできること	波野小学校 二年	内野 史菜
「ありがとう」はまほうのことば	高松小学校 二年	荒田 瑛仁
ぼくとみんなをつなぐあいさつ	大同東小学校 二年	安重 滉大
ゆう気をだして	中野東小学校 二年	長岡 瑞季
ぼくのおばさん	中野西小学校 二年	倉川 渓
困っている人を見たらどうする	豊郷小学校 三年	小池 結斗
こまっっている人を見たらどうするか	鹿島小学校 三年	村上 大晃
ぼくにできることは何か	鉢形小学校 三年	城内 史也
みんながえがおになるくらし	大同東小学校 三年	廣谷 昊音

かいごつてなんだろう	大同東小学校 三年	高橋 心葉
いま私たちができること	鹿島小学校 四年	田中 志歩
車いすがあればどこにでも行ける	鉢形小学校 四年	中村 空詩
助け合う気持ち	大同西小学校 四年	小澤 縁
わたしのまわりの福祉	中野東小学校 四年	佐藤 滯
福祉体けんを通して学んだこと	中野西小学校 四年	大川 紗那
子どもふくしたんけん隊に参加して	波野小学校 五年	大川 緒実
思いやりってどういうこと	鹿島小学校 五年	根本 莉歩
しょうがいについて	平井小学校 五年	白土 空
言葉の力	大同東小学校 五年	中村 歩夢
家族の大切さを考えて	中野西小学校 五年	安田 義翔
私とほちよう器	波野小学校 六年	青山 紗奈
最後まで走りぬく	鹿島小学校 六年	西川 心春
祖母の笑顔を見るために	三笠小学校 六年	瀬尾 夢萌
3万分の電話	大同東小学校 六年	飯島 義基
九十九歳のおおばあちゃん	大同西小学校 六年	寺西 恵怜菜
見て聞いて思ったこと	中野東小学校 六年	矢口 陽葵

【佳作入選作品】(中学生の部)

誰かのために私ができること	鹿島中学校 一年	斉藤美優
私にもできる小さな思いやり	高松中学校 一年	田上卯花
地域の人たちと交流するために	鹿島高等学校 附属中学校 一年	井ノ上品
生活を豊かにするために	鹿島高等学校 附属中学校 一年	岩本優芽
障がいについて	鹿野中学校 二年	片山蒼
何のために	鹿野中学校 二年	高田香奈
受け継ごう、先輩方からの優しさを	鹿島高等学校 附属中学校 二年	宮崎陽南子
できる事をできるうちに	高松中学校 三年	柿功太郎
気遣い	高松中学校 三年	三島優花
存続と向き合う	鹿野中学校 三年	浅間柊太
高齢化社会の中で	平井中学校 三年	坂内陸大
社会を明るくする魔法	鹿島高等学校 附属中学校 三年	鈴木木結衣

【佳作入選作品】(高等学校生の部)

これが私	鹿島高等学校 一年	瀬田菜々香
介護について	鹿島高等学校 一年	小松崎渚奈
思いやりと優しさ	鹿島高等学校 二年	中野叶夢
障がい者とともに	鹿島高等学校 二年	栗又彩寧
ボランティア経験から学んだこと	鹿島学園高等学校 二年	滑川由季乃
思いやりとは	鹿島学園高等学校 二年	中田麻妃菜
あなたも私も通る道	鹿島学園高等学校 二年	吉野成美

児童生徒福祉作文応募数

●小学校

学 年	応募数
1 年	57
2 年	72
3 年	92
4 年	150
5 年	133
6 年	135
合 計	639

●中学校

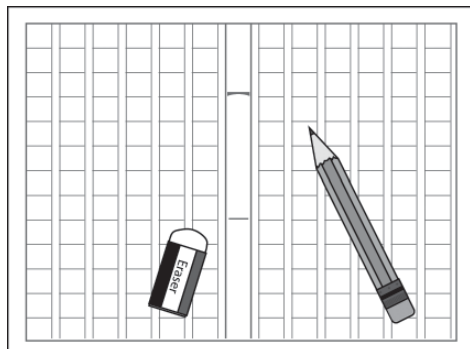
学 年	応募数
1 年	310
2 年	78
3 年	88
合 計	476

●高等学校

学 年	応募数
1 年	117
2 年	99
3 年	0
合 計	216

●応募総数

小 学 校	639編
中 学 校	476編
高 等 学 校	216編
合 計	1,331編



あとがき

本年度の応募総数は一三三二編、小学校六三九編、中学校四七六編、高等学校二一六編でした。これまで同様、多くの児童生徒のみなさんの積極的な参加がみられ、各家庭や各校の福祉作文に対するご理解が得られているものと深く感謝いたします。

各学校の審査を通過した作品一つ一つを、筆者の気持ちやその場面を思い浮かべ味わいつつ読ませていただきました。内容的には、学年が上がるにつれて、身近な家族のふれあいから学校での体験、地域社会、日本社会、さらには人間としての生き方についてまで視野や心情の広がりが感じられました。

「みんながえがおになるくらい」のテーマを受けて、どのような過程を経ながら限られた枚数で自分の思いを表現していったかは、審査委員として興味のあるところですが、間口が広く、入り方において、他の作文にはない難しさが福祉作文にはあると思います。基本的には、動機となる体験や経験がないと難しいかと思えます。誰しも一人で生活しているわけではないので、普段の生活で一人一人の力では体験や経験の差もあり、書く素材を見いだすのは本当にたいへんです。書く過程に於いて、家族や身近な人とテーマについて話し合うことも意義のあることと考えます。その過程で、新たな気づきや認識も生まれるでしょうから。

全作品についての紹介はご容赦いただき、最優秀、優秀作品についていくつか紹介をいたします。小学生の作品では、家族やクラス、地域の身近な人とのふれあいについての体験を通して、愛情に裏打ちされた人間関係、何気ない助け合いの大切さ、自分からするあいさつの大切さ、子どもでもできる社会貢献活動、身体へのハンディを生きる力に、車いす体験での学びなどの多様な作品に出会うことができ、共感しました。中学生の作品では、障がいを超えて働く人への尊敬、高齢の方への隣人愛、差別や偏見のない社会、病氣と闘う曾祖父の努力、命にかかわる医療機器使用者への社会的配慮、住みやすい街づくりへの握言、父の職場でのけがと父母の心配り、祖父の免許更新の葛藤と家族のサポートなどの作文に心が温まりました。高等学校生の作品では、地域の人と繋がる公園清掃、生きることへの答え、違いは尊い個性、祖父の術後のリハビリと福祉の充実、相互の正義の尊重の大切さ、懸命に生きる人への福祉のあり方など、身近な人への福祉のあり方や人権についての考えを交えての深い考察に感動しました。終わりに児童生徒みなさんの今後の成長とご活躍をお祈りしあがきとします。

審査委員長

本田敏尋

児童生徒福祉作文審査委員

本田敏尋 元市立中学校校長

糸川康子 民生委員児童委員
(主任児童委員)

吉田いさ子 個人ボランティア

日向寺恵美 鹿嶋市食育クラブわかば会長

内芝秀美 鹿嶋市青少年育成市民会議会長

中津智宏 福祉体験講話講師

伊藤みつゑ 鹿嶋市読書団体連合会

大黒道也 波野小学校教諭

飯岡和代 中野西小学校教諭

(順不同・敬称略)



第44集
児童生徒福祉作文集
令和6年度

編集・発行 社会福祉
法 人 鹿嶋市社会福祉協議会
後援 鹿嶋市教育委員会

〒314-0012 鹿嶋市平井1350-45 (鹿嶋市総合福祉センター内)
TEL 0299-82-2621・FAX 0299-83-0242
ホームページ <http://www.kashima-shakyo.jp>
Eメール k-shakyo@sopia.or.jp

この事業は皆様から寄せられた赤い羽根共同募金の分配金によって運営されています。